

出合いたい大恐慌下のアメリカの少年時代のプロコウスキーに
スキーに
十亀弘史

久しぶりにプロコウスキーの名前を見た。プロコウスキーは一九二〇年生。ドイツで生まれ、アメリカで活躍した詩人、小説家で、酒びたりの人物として、また、パンクな短編や詩で、私たちの世代では人気作家の一人だった。ところで、今月のこの作者の一連を読むと、膨大な読書量におどろかされる。私はと言えば、この作者が全部読んだという『ドン・キホーテ』さえほとんど読んでいない。たしか筑摩書房の世界古典文学全集で何十ペーじかを読んで、途中で投げ出した思い出がある。若いころからの読書をあらためて思い起こした。

私って可愛がられていたんだなあひとつひとつにそのことを思う
笹本 碧

入院生活で、家族の中の自分の位置をあらためて見つけた一首。下句、やや具体性に欠けるのが残念だが、独り言でつぶやくようなリズムが、心の深部を伝えている。これを書いているいま、笹本さんはもうこの世にいない。五月二十五日締切の本号の七首が、ほとんど最後の歌稿かと思う。まだ三十代。若い死は悲しい。

悉く説を伝へし常縁の覚悟を教師になりて知りなき
御手洗靖大

「古今伝授」の祖として知られる東常縁である。『古今集』にかかわる秘伝を、責任をもって継承する役割を自覚的に引き受けた常縁。その常縁の中核を「覚悟」という一語でとらえたところがポイント。

短歌の現在

No.460 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

恐童の記憶かさこそ語るべしソルトレイクのほの赤
き塩
倉石理恵

アメリカ旅行の一連中の一首。ソルトレイクシティはモルモン教の中心地として有名だが、琵琶湖の七倍もあるという塩水湖ソルトレイクがある。そこで赤い岩塩がとれるのだろう。勝負どころだった「かさこそ」が今一つ説得力に欠けるが惜しい。

若葉もえ森の木洩れ日踏みてゆく坂の途中で待つ人
が
いる
片岡なおこ

坂は森のほとりにあるのだろう。「坂の途中で待つ人がいる」という下句、リズム的にきつぱり決まった感じ
で、いい。

臍横に皮下硬結の一つあり長き歴史を我に告げける
月丘ナイル

柔らかいはずの腹部にある硬い部分は、最近になって急にできたものではなく、五年十年単位の患者の個人史にかかわる、との意味だろう。医師として関われる部分と関われない部分が見えた瞬間に取材した一首。

ほろほろととめどなく降るえごの花見つつ「無倦」
といふを思へり
三輪良子

「無倦」は文字通り「倦むことなかれ」の意味で、論語の言葉だが、親鸞の「正信偈」にも「大悲無倦常照我」とある。ここでは、親鸞を考へるべきかと思う。えごの花の降り方のとめどなさは、阿弥陀さまの慈愛の深さを連想させる、そんなイメージだろう。意外な連想が読者の想像を広げてくれる。